



Taka Ishii Gallery

Photography / Film

5-17-1 2F Roppongi Minato-ku Tokyo #106-0032, Japan
tel 03 5575 5004
fax 03 5575 5016
web www.takaishiigallery.com
email tigpf@takaishiigallery.com

エド・ヴァン・デル・エルスケン 「セーヌ左岸の恋」

会期：2015年3月19日（木） - 5月2日（土）

会場：タカ・イシイギャラリー フォトグラフィー/フィルム

タカ・イシイギャラリー フォトグラフィー/フィルムは、3月19日（木）から5月2日（土）まで、ストリート・フォトの先駆者と称される20世紀を代表するドキュメント写真家、エド・ヴァン・デル・エルスケン個展「セーヌ左岸の恋」を開催いたします。オランダのアネット・ゲリンクギャラリー協力のもと、本展では、1956年に発表された処女写真集『セーヌ左岸の恋』（*Love on the Left Bank*, 1956）に収録され、1970-80年代に本人の手によってプリントされた作品15点を展示いたします。

1925年オランダ・アムステルダムに生まれたエルスケンは（1990年没）、第二次世界大戦後、父親の9x12判カメラで写真を撮り始め、フリーのカメラマンとして各地を転々としながら街の姿を写してきました。戦後の虚無感や復興期の文化的貧困と、新しい社会・文化への渴望の狭間でもがきながら、エルスケンは1950年にヒッチハイクでパリへと向かいます。当時のパリでは、目的もなく荒んだ生活を送る若者たちがセーヌ左岸のサン・ジェルマン・デ・プレにたむろしていました。さまざまな国の若いボヘミアンの一群に加わり寝食をともにしながら、虚無的で奔放な実存主義の青春像に強く魅了されたエルスケンは、その後の数年間彼らを撮り続けました。これらの写真は、当時「The Family of Man」展（1955年）のためパリを訪れていたニューヨーク近代美術館（MoMA）の写真部長エドワード・スタイケンの目に留まり、スタイケンのアドバイスのもと、セーヌ左岸のカフェで人生を過ごす女性アンに思いを寄せる、エルスケンの分身ともいえる若いメキシコ人の報われぬ恋の物語として、『セーヌ左岸の恋』（1956年）へと組み上げられました。

フォト・イメージで綴られたストーリーかフォト・ノベルのように構成されていて、時代のドキュメントとしての写真と、個人的な係わり合いの堆積物としての写真の、実に説得力のあるコンビネーションにある。……エルスケンは、このストーリーを、1950年から1955年の間、パリを放浪しているときに撮った写真から「構成」した。エルスケンの実際の主題は、彼もその一部であったその世代、戦争で何か大切なものを失ってしまった世代の、人生に対する感情だった。エルスケンは、彼の写真で、戦前のドキュメンタリー写真においてある意味では距離の慣習ともなっていたことを破った。

リブシメー・フィッサー「Once Upon a Time エド・ファン・デル・エルスケン、写真、1948～88」

『ONCE UPON A TIME エルスケン写真展』朝日新聞社、1993年、pp.12-13

コントラストが強く荒々しいタッチのイメージ、作家の個性を前面に出し、その人生経験を主観的・直感的に記録した「パーソナル・フォトグラフィー」、現実をドキュメントしながら虚構の物語を創造する「ドキュ・ドラマ」と呼ばれた編集手法——写真界に新風と感動を吹き込んだ写真集は、細江英公、篠山紀信、荒木経惟など、日本の写真家にも大きな影響を与えています。1975年の来日時に暗室を提供した細江が驚嘆したという、独自の技法から生み出された、純黒のメリハリのきいた力強いエルスケン・プリントをご堪能下さい。

第二次世界大戦後、エルスケンはほぼ独学で写真を学び、1947年より故郷でフリーランスの写真家として活動を始めました。1949年パリとマルセイユへの初めての旅行で撮影した写真が左翼的傾向をもつオランダの写真家グループGKfに熱狂的に受け入れられたことをきっかけに、GKfのメンバーからマグナムの現像所ピクトリアル・サービスへの紹介状を受け、1950年に再びパリへ赴き2ヶ月の暗室作業を行います。職を辞した後もパリに留まり写真を撮り続けるなかで、社会にうまく適合できない若者たちの生態を収めた写真群がエドワード・スタイケンの目に留まり、ニューヨーク近代美術館で開催された「戦後ヨーロッパの写真芸術」展（1953年）および「The Family of Man」展（1955年）に選出され高い評価を確立、また『セーヌ左岸の恋』（1956年）を刊行し注目を集めました。写真集『Bagara』（1958年）、『Jazz』（1959年）、『Sweet Life』（1966年）などを通じて50-60年代の写真家たちの旗手として世界的に活躍したエルスケンは、1960年代以降、写真と並行してドキュメンタリー映

画の制作にも力を入れました。1959年には初来日し、細江英公を始めとする写真家集団 VIVO のメンバーなど、当時の意欲的な写真家たちと親しく交流し、日本の写真界にも少なからぬ影響を与えました。日本は被写体としても重要で、1980年代にも来日を重ねており、日本で撮影された写真は前出の『Sweet Life』と『ニッポンだった』(1987年)、『日本発見』(1988年)にまとめられています。国際アフリカ旅行協会賞、オランダ・ナショナル・フィルム賞などを受賞し、1990年には集大成となる写真集『Once Upon a Time』を刊行、同名の大回顧展がオランダ・アムステルダム市立美術館(1990年)やBunkamura ザ・ミュージアム(1993年)などで巡回開催されています。

是非、貴誌・貴社にて御紹介下さいますよう宜しくお願いいたします。
尚、掲載用写真の貸出など、御質問がございましたら下記までお問い合わせ下さい。

タカ・イシイギャラリー フォトグラフィー/フィルム

展覧会担当: 小菅優子 プレス担当: 岡村万里絵

〒106-0032 東京都港区六本木 5-17-1 AXIS ビル 2F tel: 03-5575-5004 fax: 03-5575-5016

e-mail: tigpf@takaishiigallery.com website: www.takaishiigallery.com 営業時間: 11:00-19:00 定休日: 日・月・祝日



エド・ヴァン・デル・エルスケン

「Paris」1951年/ca. 1980年

ゼラチン・シルバー・プリント

イメージサイズ: 27 x 26 cm

ペーパーサイズ: 46 x 33 cm

© Nederlands Fotomuseum / Courtesy
of Annet Gelink Gallery, Amsterdam



エド・ヴァン・デル・エルスケン

「Paris 1950」1950年/ca. 1984年

ゼラチン・シルバー・プリント

イメージサイズ: 23 x 22 cm

ペーパーサイズ: 31 x 24 cm

© Nederlands Fotomuseum / Courtesy
of Annet Gelink Gallery, Amsterdam